

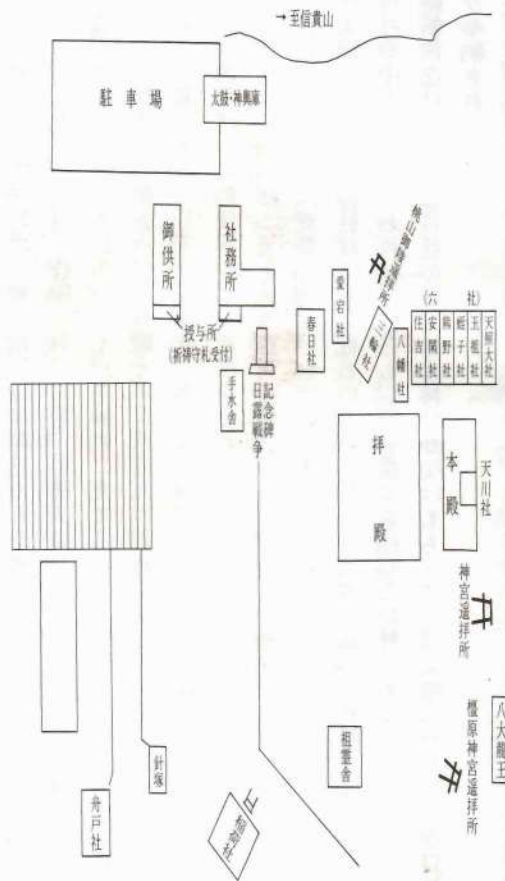


河内二之宮

恩智神社由緒略記

大阪府八尾市恩智中町五ノ十鎮座
電話（〇七二九）四三二七〇五九

恩智神社境内図



オオミケツヒヲオオカミ

(天児屋根命の五世の孫)

オオミケツヒヲオオカミ

(伊勢神宮外宮の御祭神豊受姫大神異名同神)

由緒

当神社の創建は大和時代の雄略年間(四七〇年頃)と伝えられ、河内の国を御守護のためにお祀りされた神社で国内でも有数の古社であり、後に延喜式内名神大社に列する神社である。

「恩智神社圭田八十三東三字田所祭手力雄神也雄略天皇三年奉圭田行神事云々」と記されている(総国風土記)奈良時代(天平宝字)に藤原氏により再建されてより、藤原氏の祖神である「天児屋根命」を常陸国「現香取神宮」より御分霊を奉還し、摂社として社を建立したその後、宝亀年中に枚岡(枚岡神社)を経て奈良(春日大社)に祀った。従って当社は元春日と呼ばれる所以である。

神功皇后が三韓征伐の際、当社の神が住吉大神と共に海路、陸路を安全に道案内し、先鋒或は後衛となり神功皇后に加勢したその功により神社創建時に朝廷から七郷を賜わった。以来、朝廷からの崇敬厚く、持統天皇の元年(六八九)冬十月に行幸されて以来、称徳天皇(第四八代)天平神護景雲二年(七六八)には、河内、丹後、播磨、美作、若狭の地三七戸を神封に充てられ、文徳天皇(第五五代)嘉祥三年(八五〇)十月に正三位、清和天皇(第五六代)貞観元年(八五九)正月に従二位、更に正一位に叙せられ、恩智大明神の称号を賜り、名神大社として、延喜式、名神帳に登載される。以後醍醐天皇、村上天皇の御宇(延喜及び応和三年)の大旱ばつに勅使参向して祈雨をされ、その靈験があり、それぞれ蘇生したと伝わる。

また、一條天皇正暦五年(九九四)四月中臣氏を宣命使として幣帛を奉り、疫病等の災難除けを祈った。これが当神社の大祓神事(夏祭・御祓い祭)の始まりとされている。

尚、三代実録によれば当神社は下水分社といわれている。これは建水分神社(千早赤阪)上水分社、美具久留御魂神社を中水分社といわれ、三社とも、楠一族が崇拝した神社である。

明治維新前迄は、奈良春日社の猿楽は当神社が受けもち、この猿楽座に対して、春日社より米七石五斗と金若干が奉納されていた。

社殿は、当初天王森(現頓宮)に建立されていたが建武年間に恩地左近公恩智城築城の折、社殿より上方にあるのは不敬として現在の地恩智山上に奉遷され、現在に至っている。

本殿の建築様式は、王子造り(流れ造りの一種)で極めて珍らしい貴重な建築様式である。拝殿は、両部集合造りで神仏混淆の造りとして、それぞれ江戸時代末期に地元辻野大工大長によつて建て替えられたものである。

祭典(例祭)

春 祭 四月三日(旧祈年祭、五穀豊穣を祈る祭典)

夏 祭 八月一日(旧六月二十七日に行なわれた夏越の神事(大祓)の祭典)

(神幸祭)

秋 祭 十一月二十六日

(旧相嘗祭、現新嘗祭五穀豊穣に感謝し新穀で調理した特殊神饌(御供)を供え、報恩感謝の誠を捧げる大祭。戦前は十一月下旬の卯辰の日に行なわれた。)

◎おまつりの意義

おまつりは、神霊に奉仕して霊を慰め、また祈る儀式や行事である。日本では古代より、皇室の弥栄、國家の平和、国民の幸福、五穀(米・麦・粟・豆・きび)を始め、野菜果物に至る豊作を祈願・報謝する。

御神徳(利益功德)

当神社の大神は、人々が幸福に暮らせる為に必要な三大元(衣・食・住)を守護し、万民豊樂の守り神として古くより信仰をあつめている。

当神社は河内平野を望む形で西向きにお祀りされ、河内全帯を御守護される神社であり、厄祓い(方除け・厄年厄祓い・災難除け)の神社である。

また、三韓征伐の際神功皇后の交通の安全を司さどった神様である。

撰末社

	撰末社	御祭神	例祭日	御神徳
撰	春日神社	天児屋根命	三月十三日	家内安全
末	天川神社	春日迎大明神	十月十八日	雨乞い
末	天照大神社	天照皇大神	十月十七日	家内安全
末	玉祖神社	櫛明玉命	九月二十五日	商売繁昌
末	蛭子神社	事代主命	十月二十八日	蛭子・水子守護
末	熊野神社	熊野櫛日命	四月十五日	縁結び
末	安閑神社	安閑天皇	一月二十七日	学業成就
末	住吉神社	住吉大明神	七月三十一日	海上・交通安全
末	愛宕神社	伊弉冉尊	九月二十八日	防火・鎮火
末	三輪神社	大物主大神	四月九日	厄除・方除
末	稲荷神社	倉稻彦大神	二月初午	商売繁昌
末	舟戸神社	舟戸大神	一月十六日	漁師の安全・守護
末	八坂神社	素盞鳴命	十月十七日	縁結び・家内安全

夏祭神幸祭

八月一日（古くは、おんはらい祭と云う。住吉祭と同義）

三韓征伐の功により住吉大明神と恩智大明神の親交深まり、夏祭を共に行い（旧六月二十七日）神輿の渡御を執り行なわれた。途中撰津平野と河内との境界蔵作村の南（現在大阪市平野区加美春日町）春日神社に御旅所があり、そこで一泊留り、住吉大明神より幣帛奉まつりて厳肅且つ盛大に祭典が斎行され、御一夜を過ごされて翌帰還されたと伝わる。

天王祭

十月十七日（恩智神社頓宮八坂神社）

織田信長高安城征伐の時、高安城主井上河内守城を抜け出し信貴山に向う途中恩智神社に援軍を求めた恩智神主信長軍に挑み敗走させたところ。信長大いに怒り遊左河内守家老伴庄佐衛門に命じて火を放たせ。本殿奥院まで消失し、その後信長の命により天王森に八坂神社を創建し素盞鳴尊を奉祀し後、本殿奥院再建された。

天王森（頓宮）

当神社の御旅所で毎年八月一日の夏祭の際渡御があり、神輿・太鼓台が休憩し、夜の宮入りの昇き出しは壮観なものである。

八大龍王尊

除災与楽と五穀豊稔を祈り、氏子有志により昭和六十三年にお祀りされる。

主な神事

一、お粥占神事（作物の豊作占い）正月十五日早朝（天暦年間（九四五〜九五六）村上天皇の発願にて行なわれる）

女竹十五彦位のもの、先端をハスに切り八十本を細い縄で束ねる、小豆五合米二升を洗い清め、大きな鉄鍋にて煮く。煮きながら竹筒の中に粥を流し込み、一本ずつ帳簿に合わせて占竹を割り、その年の豊作物の吉凶を占う。

一、おき上げ神事（年間の晴雨占い）正月十五日早朝

境内の榎の木を用いそれを削り一連六個ずつの棒を二本作り（十二ヶ月とする）忌火にて焼納する。三

宝に木灰を入れてその上に取り上げ神前にお供えし、祭典終了後、占い（年間の晴雨占い）を公示する。
一、御供所神事 十一月二十四日

当社（元）卯辰祭の御供（マガリ）は、醍醐天皇第六十代の延喜年間（九〇一―九二二）に定められた相嘗祭（昔十一月上卯日に新穀を奉獻する宮中祭祀（日本書紀天武天皇五年十月丁酉の条に「奉幣帛於相新嘗諸神祇」とあるのを初見とする）で全國官社三三三社の内、特別に由緒ある神々七十一座のみ相嘗祭が斎行される内、当社二座が斎行）に朝廷より奉獻された供饌である。

当時、御神前に於いて、御神楽が奏せられ公卿殿上人等が参集し饗饌賜祿などの儀式が取り行なわれたと伝わる。

此の人形の供饌は、古代において祓の儀式の供え物として使われた現大祓神事の源であると考えられる。又、新穀で調理し、神様への御供として感謝の誠をお伝えするものであるとされている。

此の御供を調理する奉仕者（神職・総代・御供所社家）は、厳重な潔斎を行い心身共清めた後奉仕する。河内最古の当社では、こうした由緒ある供饌を秋の大祭（十一月二十六日）にお供えし、氏子崇敬者に頒布する習わしが今なお続けられている。

一、立松神事 十二月二十四日

新しい年と共に神様をお迎える為に、社に雄松（右側）雌松（左側）を立松する。同様にして七五三縄をも調製し新しい注連縄を飾り、新春を迎える。総代、宮周旋にて奉仕する。

年間諸祭典

一月一日	歳旦祭	九月二十五日	玉祖社祭（末社）
一月三日	元始祭	九月二十八日	愛宕社祭（末社）
一月十五日	お粥占・神事 おき上げ神事	十月十七日	天照大社祭（末社）
	神札・神符焼納祭	十月十七日	八坂社祭（末社）（天王森）
一月十六日	舟戸社祭（末社）	十月十八日	交通安全祈願祭
一月二十七日	安閑社祭（末社）	十月十八日	天川社祭（末社）
二月節分日	節分厄除祭並神楽奉納神事	十月二十八日	蛭子社祭（末社）
二月第一日曜日	節分湯立神事	十一月十五日	七五三詣（十一月中）
二月初午	稻荷社祭（末社）	十一月二十四日	御供所神事
三月十三日	春日社祭（摂社）	十一月二十五日	秋季例祭宵宮
四月三日	春季例祭	十一月二十六日	秋季例祭（卯辰祭） 神楽奉納神事
四月九日	三輪社祭（末社）	十二月二十四日	立松神事
四月十五日	熊野社祭（末社）	十二月三十一日	大祓式
六月三十日	大祓式 茅の輪神事	十二月三十一日	除夜祭

七月三十一日 住吉社祭（末社）
八月一日 夏季例祭
神幸祭（御祓祭）

毎朝御日供祭、
毎月一日・十五日 月次祭並特別祈願祭斎行

伝承説話

神武御東征と母木邑

昔恩智村のことを母地母木邑オモチと云われ、その呼び名の起りは、神武天皇の御東征の折の伝承として日本書紀の中に記されている『初め孔舎衛クッサガ（現東大阪市）の戦いに人有り、大樹に隠れて難ツラサヒを免れることを得たり。仍りて其の樹を指して曰ふ（神武天皇）「恩母オモモの如し」と時の人（村人達）因りて其の地を號ナヅケけて母木の邑ムキノと云う』

聖徳太子は、この伝承の通り信貴山に向われる途中（旧信貴山参道現在も残る）家来に命じてその木を捜がされたがもうすでに枯れてしまっていた。

太子は非常に残念がられ、その古株を持つて来させて色々考えられた末、河内の鞍藏に命じて仏像を刻まさせいつの世までも残すために、当社にお祀りする様命ぜられた。

明治初年太政官令神仏分離により、感応院（当社石段下高野山普門院末寺）に現在お祀りされている。

伝承御歌

（祝歌） はままつの音は ざざんざ。かけになりすんまして （三拍子打つ）

舟戸講が一月十六日に参拝をすませた後、ご神酒をいただき直会ナウケに歌う祝い歌

（俗謡） 恩智祭に行きたいけれど 布子質屋ヌコの蔵にある

恩智か 尻か 下のうたての 音頭とり

（和讃） 恩智には日に幾度も手向する 赤井戸清き 上の宮寺

関伽井戸（清明白）

弘仁の昔 空海（弘法大師）（八一〇年頃）が当社に参詣の折、供饌ゴウケン桑炊ソウシの水の乏しきに欺たぶき、峡谷に水を求め、一度岩底タビに錫杖シヨウサウを突き立てれば霊水滾々コジと湧き出したと伝わる。

この一掬ヒトコの霊水は、難病を治すと伝えられる。現在御祈禱水として崇敬者皆様にお頒している。